

冒険教育プログラム体験が大学生の自己形成意識に及ぼす影響 ～理想と現実の自己に着目して～

奥長太志 (生涯スポーツ学部 野外スポーツコース)
指導教員 黒澤毅

キーワード：冒険教育プログラム体験 大学生 自己形成意識 理想と現実の自己

1. 序論

近年、社会全体に漂う目的喪失感や閉塞感の中で、学ぶことの目的意識が見失われ、まじめに勉強したり、自ら進んで努力し、何かを身に付けていくことの意義を軽んじる風潮が広がっている。このような現状にある青少年に、学ぶことや生きることへの主体的な態度や、何事にも真摯に取り組む意欲を身に付けることが必要とされている¹⁾。

一方、冒険教育は、新しい人間関係や困難な活動、未知の自然環境から生じるストレスを克服することで、自己を見つめ直し、自己の可能性を再評価し、発見する機会を持つことができる。その中で現実自己を認識し、理想自己を再考することで、自己形成意識の向上につながると思われる。

そこで本研究は、冒険教育プログラム参加者の自己形成意識の変化を明らかにするとともに、その要因が理想と現実の自己にどのように影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【対象】2011年9月10日(土)～9月16日(金)(泊7日)に実施された野外専門実習に参加したB大学野外スポーツコースに所属する3回生16名(男子8名、女子8名)を実験群とした。また、筆者が無作為に選出した同学年の12名(男子5名、女子7名)を統制群とした。実習のプログラム概要を表1に示した。

表1 プログラム概要

1日目	縦走登山・ソロ活動	5日目	シーカヤック
2日目	ソロ活動・縦走登山	6日目	90kmオーバーナイト
3日目	40kmハイイク	7日目	ハイイク
4日目	シーカヤック		

【調査用紙】

①全体的自己形成意識調査：梶田²⁾の自己成長に関わる尺度(2因子10項目)を一部修正して用いた。
②理想と現実の自己についてのアンケート：中間³⁾の個人にとっての重要な理想自己の表出とその質の評定を調べるためのアンケート用紙を用いた。

①②の調査時期を表2に示した。

表2 調査時期

調査時期	実習2ヶ月前	実習前日	実習直後	実習1ヶ月後
	pre1	pre2	post1	post2
実験群	①②	①	①②	①②
統制群	①②	-	-	①②

③ふりかえりシート：理想と現実の自己の変化に及ぼした実習中の経験を明らかにし、その内的動向をつかむものとして筆者が独自に作成した用紙を用いた。これを実習前日、実習中の毎日の全体ミーティング時に実施した。

3. 結果と考察

1)全体的自己形成意識について：実習を通して全体的自己形成意識得点は、有意に向上した。実習中に失敗を経験することによって、より強く自分を見直し、正確な現実自己を認識した上で、成功

を目指す意識が強まり、自己形成意識に影響し、そこで成功体験を重ねることによって高まったと考えられる。分析の結果を表3に示した。

表3 全体的自己形成意識得点の平均と標準偏差及び分析結果

群	n	pre1	pre2	post1	post2	χ^2	F検定		
							pre1	post2	
		M(SD)							
実験群	16	39.94(3.32)	38.06(4.04)	42.00(4.24)	38.31(3.36)	22.13***	-	-1.15	-0.19
統制群	12	38.17(3.41)	-	-	38.25(4.67)	-	-0.08		

***p<.001

2)理想と現実の自己について：「理想自己と現実自己の不一致」においてpre1-post1間で有意な差がみられたが、「理想自己の実現可能性」、「理想自己の困難度」において、有意な差はみられなかった。実習1、2日目の失敗体験を糧に、その後を成功に導こうとする意識が芽生え、行動した結果、主体的な成功体験に至った。また、過酷なプログラムを乗り越え、自己の設定した理想に対する現実の自己の位置付けを見直したのではないかと考える。実習1ヶ月後には困難度得点が増加した。実習1ヶ月後に新たな理想自己を挙げたことも要因の1つに考えられ、実習を通して新たな自己の可能性を感じ、高い理想自己を掲げることで、実習1ヶ月後の困難度得点が増加したと考えられる。

3)全体的自己形成意識得点変化にみた理想と現実の自己について：得点変化の高い者(以下：上位群)と低い者(以下：下位群)について比較した。結果、不一致得点が両群共に減少した。実現可能性得点は上位群は減少し、下位群は増加した。困難度得点は両群共に減少したが、下位群の方が得点が著しく減少した。実現可能性得点が増加した上位群は、過酷なプログラムのため、葛藤が起こりぶつかり合う場面があったが、理想と現実の自己のギャップを受け入れ、可能性を再考したと考える。下位群は、過酷なプログラムを乗り越え、自信をつけたことやグループ活動の中で、仲間と向き合い、自己と見つめ合い、自分の新たな一面を見出すことができ、実現可能性得点が増加したと考えられる。困難度が下がった下位群は、仲間と頑張ったことで自分自身の新たな可能性を発見し、実習前に挙げた理想自己を評価することで困難度は減少したと考えられる。

4. まとめ

冒険教育プログラムを通して、大学生の自己形成意識は向上し、過酷なプログラムを乗り越えることによって、自己を見つめ直した。また、自己の設定した理想に対する現実の自己の位置付けを見直し、新たな可能性とさらなる高い理想を掲げることが明らかとなった。

引用・参考文献

1)中央教育審議会(2002)：「新しい教育教育の在り方について」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shinggi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm) (2011年12月6日アクセス)

- 2) 梶田敬一(1988) : 自己意識の心理学 (第2版)、東京大学出版
- 3) 中間玲子(2007) : 自己形成の心理学 風間書房